

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
3月号
通巻547号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大和民俗公園の梅林 大和郡山市 みんなの広場「らんまん」松下広実さん画(文・7頁)

再録 昭和41(1966)年4月23日発行『すさのお』第4号より

神意に添う心

法主 矢追日聖 (満54歳)

『すさのお』紙(100号で『おおやまと』と改題)では、第1号「信仰こと始め」、第2号「自然神と人格神」、第3号「幸福は自分の魂の中に」と、法主様が宗教や信仰について基本から書いておられ、『おおやまと』でも再録しています。その続きを再録をしていきたいと思えます。(編集部)

法主寸言

信仰というのは、同じ宗教を信じている人が多いから、正しいというものではない。
立派な建物ができたから、正しい宗教というものでもない。

この前の話の中で私は「大倭教は、矢追日聖の別名のようなものであります」といったのでありますが、あなたはおぼえていらっしゃるでしょうか。

だから大倭教の真髄をつかもうと思えば、矢追日聖という私を、裏から表から、縦から横から、あらゆる角度から観察することが一番近道と思うのです。

人それぞれ、これは、十人十色の見方があります。これは仕方のないことです。あなたがもつ心によってとらえるのですからね。昨年の私と、今年の私があなただから見れば変わっているかも知れません。あなたと私の親交の度合でもかなり異ってくるでしょう。

何はさておいて、矢追日聖という人間は、全く得体の知れない怪物のようですから、近づくあなたは、しっかりとマユ唾

で用心してこなければ、取返しつかない人生に大きな汚点を残すかも知れませんよ。本人が言っているのですから間違いはないでしょう。

人々は何かの宗教団体に加入すれば、宗教をもち信仰していると思っけています。これもいいでしょう。けれどこんなしばらくのようなうさい仲間に入らなくても、自分なりに宗教はもてるし、信仰もできます。

朝起きて、一歩外に出て、東から昇る太陽に向い合掌して「マン、マン、アン」と拝んでる老人をよく見受けたものです。野良仕事を終え、沈む西日に向って拝む、こうした清純な態度、この心が立派な信仰と私はいいたいのです。考えてごらん、日々の生活の中で、喜びをもち、感謝する心で暮すことは一番幸福といえるでしょう。これに勝る俸せはどこにあるでしょうか。この心境は数ある宗教団体等に入らなくても得られるものです。また世間には、わしには神も仏もない。無神論者やと大言する人も多く見受けまます。若しこの人が、こうした態度で生涯俸せに、喜びをもってゆけたとしたら、この人は立派な無神論に徹した宗教をもった人ともいえるのです。

真に宗教のあるといふ

真の宗教は、寺院、教会、神社や、また宗教団体と名のつくような所には無いのですよ。自分から離れた所にはありません。

開けてみなさいよ。あなたの心の中にあることが分ります。宗教は人間一人一人の心の中にあるものですからね。宗教として言われてきた神さんや仏さんなどが、若しあなたから離れた所にあるとすれば、つまり手の届かない高い所にあるとすれば、そんな所へ両手を合せ、はいつくばって拝

んだところで何の救いがあるというのですか(相対的神仏の意)。分りますかね。神さん仏さんは自分から切離れた所にはいないのです。自分の心に神さん仏さんが存在しているのです。自分の中にある神さんや仏さんだからこそ救いがあり、導きもされるのですよ。

例えば、天地の恵みに心から祈りを捧げるとします。拍手を打ち、合掌もする、又祝詞を唱えてもよろしい。こうした祈りは自分の心から発します。放たれた念波は宇宙にくまなく遍満して、瞬間に起点となった自分の心の中へ戻ってきます。放たれっぱなしで何処かへ消えるものではありません。考えてみれば、天地の恵みに感謝した祈りは、結局、自分の心に向って祈っていることになりまます。これは、天地と自分は、一体である結びつきがあるからなんですね……。こんなかた苦しい話は一応この辺にして止めましよう。切りのない問題ですからね。

神ながら式

中でも神ながら式の信仰は、さきほど話したように現在各地にある宗教団体に入らなくともできるものです。天地自然の中から人間として歩むべき道を求め、大自然の心に添って自分をつくってゆけばよいのです。実際問題として、自分で道を造りその上を自分が歩いてゆくことは、大変難しいことでもありますが、誰かが造ってくれた道を歩んだ方が楽でもあるし、又時間もかかりません。そこで、この道造りの「命」(みこと)をもつて生れてきた過去の人では、釈尊やキリストといった人がいるのです。こうした難しいお役目で生れてきた人だから、後の人はその労を謝して聖者とか、超人的な絶対者として尊敬するようにな

ったのですがね。私も今の世ではこの種の道造りの「命」をもって生れています。「命」であれば自分にはこれ程やさしい楽な仕事はないのですよ。

個人差即平等

大倭の人々を歩かせるための道造りでありますから、造った人、その道を歩く人と、どっちが偉いか、考えたらどうですか。

水の中をもぐって魚をとっている鵜と、川べりで土をかいてミミズを食べている鶏が、顔を合して話したとすればどうでしょう。この話を側で聞いていたら腹をかかえて笑うでしょう。

人間には生れながらの個人差があります。鵜と鶏のようにね。使命の相違ということですよ。各々がもつ個人差が尊いのです。

宗教団体にもその団体のちがひがあります。しかし類をもつて集まっていることだし、その人達には有難がって信仰している宗教ですから、それに対して敵対視したり、けなしたりすること自体がおかしいんで、こういうことは、宗教に対する根本的な反逆的行為となるのですから、これは互いに慎まなければなりません。大倭へ集る人達には、そんな不心得な人はおりませんからこの点は喜ばしい事です。

必要なものだけが実在している

いま私達が住む世界に、つまり地球の上に実在している一切のものは、自然の心(神意)から見れば、何かの役に立っていて、必要なものといえます。これを小さく人間の世界にしぼって見れば、何億かの人間達がいたとしても、無駄な人間は一人もいないということです。何かの「命」つまり

神意を受けて生れてきているのです。尊いことです。あなたは自分もつ尊きを知っていますか。臨終の時でもよろしいから、それを知るよう精進して下さい。私も手伝いましょう。

宗教では「救い」ということをよく言います。救いということは一体何のことでしょうか、口にする人が分っているのだろうか、フイと思うことが時々あります。救いといえは、助ける、助かるという意味でしょう。一体、何が何を助けるのか、何が何に救われるのか。これは大切なことですから、あなたも胸に手をあててよく考えて見たらどうですか。

宇宙には宇宙の心があり、またその働きがあります。太陽には太陽の心があり、またその働きがあるように、土にも、空気にも、水にも、植物にも、人間にも、その他いづれのものにもあるんです。第一回るとき、この心のことを「大神さん」という言葉で説明しました。それ等の心の働きは、それだけのものの働きで、他のすべての物から切離したものではありません。太陽であれば、太陽だけの働きではなくて、その働きは、土や空気や水や人間などの働きとも、切っても切れない結びつきがあるのです。こうした組立ては、万象が生み成される以前に、宇宙の心(絶対智、神)によって造られていたものです。科学はこの宇宙の心よりも、その現象として働くその根源を知ろうとしています。小さい人間の智的能力によってね。これも有難いことです。ところが、宇宙の心を霊的感応で味合うことが、誰にでもできるようになつたならばね、更に有難いことといえるのです。

人間の大罪

これさえ分れば、人間として生れた真の幸福を

つかむことができるのですがね。科学もいずれば、この世界に到達すると思います。

今の科学者は残念なことに、宇宙の心(神)が分らないから、脱線して核兵器など造るといふ結果になるんですよ。言わば、神の心を冒瀆している大きな罪を造りましたよ。この償いは知ると識らざるにかかわらず世界の人間どもがやらねばなるまい。

だからといって神が私達に罰を当てるわけではありませんよ、上向いてはいた唾は自分の顔にかかります。ヤッホーと山で叫べば、あとからその山彦は自分の耳に戻ってきます。核兵器のような神意に逆らうものを人間が造ったのですからその造ったもので造った人間達が惨めになるのはあたり前のことです。斯くすれば、斯くなるということには、自然の理で示されています。罪を造って償いを恐れて逃げることは卑怯ですが、神の目から逃げおこせるものではありません。恨みなければ神を忘れた自分をね……。

分に忠実に生きる自分に

中国でこの間、実験をやつたらしいですが、そして今日本の領土に降っている雨にかなりの放射能があると各機関は報道しています。よそ事と思えますが、仮にこれを日本がやつたとしても、神にたいする償いの心は、私なれば同じです。雨のかかった野菜を生で私は食べていますが、恐怖感はありません。これも償いの一つと思っています。

若し害ありとすれば、一寸早く故郷へ帰るだけです。今はこの世へ出張しているようなものですからね。宇宙の仕組み、この神の心が人類の主導権を握る人々のところまでとどかないうちは、世の中が、科学的には進んだといつて喜ぶかもし

れませんが、神を忘れおきざりにしては、人々は刻々に惨めな生活を続けなければならぬことになるでしょう。

ベトナムを御覧なさい。今の世でこれを見て目がさめないようでは、更に大きな惨めな償いを私達はしなければなりませんよ。仕方のないことです。若し頭の上から原爆が落下したならば、喜んで死んでいける心の用意が必要でしょう。私は第一番に喜んで逝きます。だが本心は、そういうような事態にならないことを祈っています。

昭和の御時世において、私が大倭教の旗印をかかげて、この神の心を万人に知らせ、皆んなが倅せに、楽しく暮せる社会の実現を祈りながら、私が自覚する「命」に忠実な態度で挺身することができるとも、そうした惨事を未然に防ぎ、一日も早く神意に添う現世楽土建設を望むからです。

私は、世の人々のすべてが、理屈抜きで歩調を揃え、この方向に進んでほしいのです。宗教家が唱える「万教帰一」の方向、嬉しいことです。但し、宗教団体も「宗教我」という心を先に洗い清めてかかることです。人間心であれこれと規制を作り組織をもち、更に一色に塗つたような教団は、万教帰一を叫ぶ資格がないと私は言いたいのです。融和の心がどこから出てくるか分からないからです。

徒党を組んで平和を叫ぶ人々に、真に平和な心があるでしょうか。目の前に押し付けたような平和運動も否定はしませんが、私は一人一人の心の中に内在している神の心を揺り起す方の運動を担当するようにできています。真の平和を希望する人は挙つて大倭へ参集して下さい。先ず神意に添う自己を造ることから出発しましょう。救いについての話は次回に譲ります。

(昭和四一・四・一五 日聖記)

青山日元さん追悼特集

(順不同)

共に歩む

法主 矢追 日聖 (満53歳の時)

青山富雄(日元)という男が中河内の堅下に生まれていた。どんな宿縁あったのか分からないが、大倭教の草創期に男女関係より更に更に深い契り秘めて、三十四歳の男さかりに篤篤のような夫婦仲を血涙の思いで断ち切り、子供を分けあって私の懐ろに飛込んできた。(昭和)二十二年の正月の六日であった。

神意、来る者をして拒まず、ああ無情、宿命の冷酷さよ!! 私はわが股裂きの責苦を耐え忍び、断末魔がかもす痛恨の思いで彼を迎えたのであった。入門した頃はしばしば放心状態で彼は松の梢を見上げていた時もあった。彼を案じて共に家の子となった神野主計に喝を入れられていたのも昨日のように近い。

この年の八月、彼の娘である良(十歳)と節子(八歳)の二人を大倭へ連れてきた頃から、どうやら彼に人間復帰の兆しが見え始めてきた。近く宗教活動の拠点を大倭の現在地に定めよとの神示があったので、この夏、日元を荒廃していたこの地に移らせ、宮作りの準備をさせた。神野と二人神ながらに作業は進められていった。わが意志ではなく、家庭の破壊を演じた親達

の悲劇の末路が、この二人の子供を父のもと、狸のなき声に眠りをさます大本宮の在りし日の山小屋に連れてきたのだ。胸の張り裂ける思いが今に残る。

十月三十日、私は実家を弟隆義に一任して家族と共にここに遷ったのである。荊棘の道は既に伏せられ待ちかまえていた。

(『やわらぎの黙示』208頁より)

紫陽花邑の草分け

紫陽花邑代表 矢追 家麻呂

青山日元さんは大倭へ来る前、あの美声で河内音頭の音頭取りをしていた。当時は音頭取りさんにはお札に町名などを書き込んだ木の柱を渡す習慣があったらしく、日元さんのところには何本もそうした柱が置いてあったのを覚えている。



街頭宣布 左から鈴月かあさん、田中奇久法さん、青山日元さん

日元さんが何も話せなかったと言うと、『法主様は『仮に一人も聞いてくれなくとも、誰もおらなくても、自分の思いを天に向かって叫んでこい。自分から発した音波は、大きく波紋を画き遍満して、宇宙のどこかでその音波を感じる者がおるのだ。何の時でも決してものごとの効果を考えるな』と、諭されました。』

(『とおやまと』平成10年9月号より)

日元さんの人生は、霊界からの指示もあって、法主さんと出会って大きく転換した。法主さんに先立って、日元さんは一番最初に大本宮に入植して、皆が暮らす茅葺小屋を建てるなど受入れ準備をしてくれた。

その最初の小屋は後に火事で燃えてしまったのだが、床はムシ口敷きで雨風を何とかしのげるようなものだった。当時は貧乏生活で、飲み水も器用な日元さんが工夫して作ってくれた濾過装置で鏡池の水を使っていた。今日の紫陽花邑がこうして発展した一番の功労者は、草分けである日元さんだと思ふ。

日元さんは純粹で一本気な人だったから、何かに食わないことがあると、誰かれとなく食ってかかっていった。でも、日元さんにとって法主さんは絶対の存在で、法主さんに諭されると無条件にそれに従っていた。法主さんのことは命をかけてでも守るという気概もあって、街頭宣布で大阪へ出かけた時も、**㊦**の旗をかかげて法主さんの側で目を光らせて構えていた。

人生の最後は法主さんが作った長曾根寮や大倭病院で世話になって幸せだったと思う。晩年のお世話をしてくれた娘の山崎波留茂さん一家も本당にご苦労だったと思う。日元さんも現界でのお役目を終えて、霊界での道をゆつくりと歩むように祈っている。

法主様の「元、元」という声

三重県名張市 目田 容子

日元さん、本当に御苦労様でした。大倭紫陽花邑の基礎を創られた法主様の手足となり、よく働き、沢山の子供達を躰け、しかられた人もいるでしょう。

日元さんが法主様に会い感動を抑えきれずに号泣されたこと、大阪の柏原で物置小屋を解体し、その材木を大八車に積んでここ大倭まで歩いて運んだ時のお話を聞いたこともあります。

私のとても印象に残っているのは、私が小学生で、大阪の大国町に住んでいた頃のことです。学校から帰ると家の前で、白い緋の着物に袴、高下駄を履いた日元さんが、バイオリンを弾き大きな声で歌っていた姿でした。恥ずかしかったので、歌が終わるまで家の近くで隠れて待っていました。とてもよく通る素晴らしい声でした。どのような聖歌だったかは覚えておりませんが、お髭もなくとてもハンサムな青年でした。

私が代表として「あじさいの箱」を始めたのが昭和五十五年ですから、もう七十年以上のお知り合いでしたね。とても可愛がって下さいました。葉書をよく下さって、達筆で難しい字もあって読めない時もありました。まだ竹林があった頃は、タケノコを掘って、容子ちゃんこれ持って帰りと私に残しておいて下さった事もありました。

法主様に「元、元」と呼ばれていたのを思い出します。そちらに行かれて、又法主様にお会いになって、「元、元」と呼んでもらって働かれるのかもしれないですね。よろしくお伝え下さいませ。本当にありがとうございます。拍手合掌

捨石

大阪府枚方市 林 修 三

古今東西、男二人組の友人や兄弟同士の固い絆に結ばれた友愛物語は枚挙にいとまがないが、矢追日聖法主、青山日元さんという師弟コンビも私には胸踊るものがある。太平洋戦争終結直後の混沌とした日本を舞台に、真の意味での世界再建を

目指した御二人の物語は、今回の日元さんの帰幽によりその第一幕を閉じた。

多くの方々と同様、私にも日元さんとの思い出は数多ある。又、日元さんの筆マメはつとに有名で、私も何十通というハガキ・手紙をいただいた。中でも印象深い一通として、一九九二年の正月早々にいただいたハガキがある。その文面に『出発当初（法主様が）申された御言葉は、俺等は所詮捨石だ!! 捨石は基礎のまだその下に在るものだ。表から誰も見えないそれが捨石だ。』の一文がある。

そして又、法主様のお書きになった「立教開宣文」の中には、捨石について「……ともに世界平和の捨石となろう。……」と、その捨石の目標が明確に示されている。

頭幽を含めた世界再建に取り組まれた御二人が現界を去られた今、第二幕の捨石達は、果たして現れてくるのだろうか？ その答は私達自身の心の内にある。

日元さんのお話

奈良市大倭町 見 田 瑛 子

四〇数年前、「交流の家」に於ける「泡沫コミューン」で、初めてお会いした法主さんの御人柄に、深く惹かれた。法主さんにお会いしたいばかりに伺った月次祭で、日元さんに初めてお会いした。青黒い御顔に、われ鐘のような大声で国津祝詞をあげられる日元さんは、ちょっと苦手な御人でした。三九年前、三月の月次祭に、この日二六歳の誕生日を迎えた良美さんを大倭に案内してから、日元さんとの新しいお付き合いが生れた。

「日元さんの家に泊めていただき、いろんな話をお聞きしたら」というのが彼の薦めでした。そ

して東京から月次祭や文化行事で伺う度に、日元さんの家に泊めていただき、創生期の紫陽花邑のこと、法主さんの言動、日元さんの人生談など、つぶさにお聞きすることになった。翌朝は日元さんの軽四輪で、大倭神宮の御給仕に御一緒し、それは二年前の大倭移住後も変わらず、85歳の誕生日を機に日元さんが運転免許を返納されるまで、毎朝続いた。日元さんの運転は、ひたすら「我道をいく」大胆なものだったので、良美さんの運転で三人で神宮に伺うようになって、正直のところ、ほっとした。

七〇年近く前「汝、ヤマトタケル、すみやかに大倭に還れ!!」と大音響で耳にしたという日元さん、毎年誕生日近くには必ず、三重県能褒野のヤマトタケル王塚古墳に御挨拶に伺われた。私達は御一緒して、大倭の有志や安中の人も参加された。掖上の琴弾原白鳥陵や、大阪柏原の白鳥陵にも御一緒した。日元さん、御自分とヤマトタケルを重ね合わせて、一筋に生き通されたようです。

「俺は男だ」「俺がやらねば誰がやる」の気概で、大倭を支え通した日元さんに、心からの敬意を表します。

百年の長きおつかれさま

岡山市 矢 部 后 代

今から45年前（大阪万博の年）、交流の家残留組のひとりと大倭で挙式し、隣保家庭となって池上団地と称す場（今の倭大病院のあたり）に住まいした。当時は大倭殖産リースとブロック工場が道路に面した所にあり、一年ほどその事務所番を兼ねていた。その横に細い急な坂道があり大倭の出入り口のひとつになっていて、時々いまでも夢に見る。

坂を下っていくと香月さんの松中庵、そしてF IWCのいもがゆ亭を過ぎたあたりに竹林があった。私は日元さんをそこでよくお見かけした。いま思えば、天秤棒で糞尿を捨てていたような気もするし、竹を切り倒していたようにも思えた。畑を耕し、村の大工さんかと思える仕事着の日元さんでいらしたが、祭事の際には白い着物に黒袴という教服、長い髪に少し甲高い声で朗々と祝詞をあげるお姿は数年前まで変わりほしなかった。

昔はとても厳しかったとのこと、でもそのころは話せばニコニコと応えてくださる日元さんだった。息子がまだ幼かったころ文化行事で二上山に登ったことと交流の家のヒマラヤ杉のことは、晩年にいただいたお便りにいつも懐かしそうにそのことが必ず書かれていた。

亡くなられた日に奈良だった私は最期のお別れをすることができた。そして今さらながらびっくりするほど、日元さんには家族が多い。法主さまの亡き後20年、日元さんは大倭共同体の実質を繋いでこられた大きな存在であった。だがあらためて祭壇の前にはずらりずらり並んだ子、孫、曾孫、玄孫さんの顔ぶれは、これからの大倭を担っていく方々だ。

あふれるほどの花々の中で眠られたお顔はじつに満足そうであり、もちろん安らかであった。

お仕事に付き従って

新潟県佐渡市 大滝 哲也

対人恐怖症のため人の顔を見て会話が出来なかった十代半ばの私は、一九七九年の春、ご縁があつて大倭紫陽花邑で生活させて頂くこととなつた。

平日の昼間は青山日元さんの元で働くことにな

り、池の堤防を補強する土木工事から始まって、農作業、木の伐採、しめ縄や門松作りなど様々なことを教わった。その多くは、現在の山の生活で無くてはならないものとなっている。

その中でちよつと変わった仕事があった。奈良の旧市街の細い路地に、クヌギの木が張り出して生えている。昔からこの木の枝を切った者が、いづれもその後大怪我や急死をしているというので、交通の邪魔になっているそれを伐採して持ち帰り焼却するというのだ。私たちがそこに到着すると、すでに十人ほどの男女が集まっていた。日元さんは早速、周囲に玉垣がしてあるその木をチェーンソーで切り始め、私はその補佐役となった。倒した幹を切るため、日元さんがそれに足を掛けると、大正時代に流行したような髪を結った和服姿の中年女性が目を丸くして、「いや〜！バチ当たるんとちゃうか？」と叫んだ。ところが、眼鏡と髷に作業服姿の日元さんは全くそれに動じなかったの、私もそれにならぬ黙々と木を軽トラに積み込んだ。法主さんによつてすでに霊が鎮められていたのであろう。

日元さんのお仕事は一年間だけだったが、私はいつしか人と普通に話せるようになっていた。霊界でもきつと、様々な分野でご活躍されるのではないかと思う。 拍手合掌

じつような縁の形

群馬県前橋市 内田 誓子

日元さんは今どんな気持ちでおられるのだろうか。私にとつて日元さんはいつとも契機のようなものでした。

私は安中にある妙義山に何故か思慕に似た気持ちを抱いていた。妙義山周辺は日本武尊が東征

の旅からの帰路、三浦半島の走水で亡くした妻を偲んで「吾妻はや」と嘆いたという場所の一つである。日元さんから手紙や写真を頂く度に心に掛かるものがあり、ある日妙義山の横を通った時、何となく日本武尊のことが思われ、それが忽ち日元さんの顔に変化していった。そして無性に涙していた。

このような縁の形があることに驚き、また自分の命に古い個人の歩んだ命が源流の様に関係していることを知る体験になった。妙義山と能褒野にご一緒出来たことは今でも心に深く刻まれている。特に台風到来の中での能褒野参詣は、かつて走水で起こった状況を彷彿とさせるようだった。伝説でなく実際の出来事だと身に覚えた。日元さんの「再現やな」の言葉が胸に響いた。

日元さんが大倭での昔の生活を「原始人のような生活」と言われていた。尋常でない程の厳しい体験をされても法主さんの力となり、法主さんと共に大倭を起して来られた。「倭は国のまほろば たたなづく青垣山隠れる倭しうるはし」その心の継承によつて日元さんが命懸けで支柱の働きをされたお陰で私達の知る大倭がある。

いつも真心をありがとうございました。日元さんご縁に心より感謝致します。時満ちて訪ねて行けば源の白き蓮花大倭に咲けり。

真直ぐに叱ってくれる日元さん

静岡県袋井市 石垣 雅設

大倭へ帰るといつも「おかえり」と手をあげ、素晴らしい笑顔で迎えてくれましたね。その度に故郷へ戻ったような、温かい気につつまれました。

昨年の日聖祭の日、妻と息子と三人で、長曾根寮に日元さんを訪ねました。それが現界でのお別

れになりましたが、長い間可愛がって下さいまして、本当に有難うございました。

日元さんの亡くなったお子様、妻と同じ歳、寅年だったと聞いたことがありました。日元さんにはお子様と妻が重なって見えているのかもしれないと勝手に推察しておりました。

私は二十八歳の時、法主様とのご縁をいただきました。野草社創業の折、法主様は設立発起人に名を連ねて下さいました。そして東京から大倭へ、何度も何度も通いました。

「石垣さん、来とったんけえ」と、法主様に声をかけていただと、それだけで疲れがとれ、元気になりました。その時、必ずカアさんと日元さんが居られました。私にとって至福の時でした。

大倭での暮らしは五年ほどでしたが、日元さんにはよく叱られました。野草社の多くの読者が大倭を訪れ、中には迷惑をかけた人もいたからです。真直ぐに叱ってくれる日元さんが好きでした。

この原稿の依頼があり、久しぶりに日元さんからの手紙を取りました。そこには法主様が、「どの様な時でも、奈母太加天腹の言霊を忘れるなよ!! その声のするところ、必ず俺は迎えにいつてあげるから」と話された、とありました。

日元さんも法主様に迎えられ、霊界での新しいお役目に就いていらっしやることでしょう。

日元さんと言えは……

紫陽花邑 杉本 順 一

私が大倭に入門して間もない頃のこと、共に入門した柴地則之さんとブロック工場で仕事をしていました。そんなある日のこと突然日元さんから声を掛けられた。

「あんたら何で大倭にきたんや」

一瞬ドキリとした。何と答えればいいのか。正しい答えが必要なのか? 頭の中を何が駆け巡った。素直に自分の気持ちと言う事にした。その時は日元さんからそれ以上何かを言われたわけではなかった。柴地さんと二人になってから、彼は「なんか踏み絵を踏まされた気分やな」と言った。日元さんが何故そんな事を言われたのかは後になって分かった。

「どうして大倭に来たのか」これは日元さんの終生のテーマだったと思う。己の魂が引き裂かれた気持のまま、入門しなければならなかった日元さん。紫陽花邑の露払いを務めてくださった日元さん、法主さんに命を懸けることで心のバランスをとっておられたのかも知れない。

私のように何かを求め好き勝手に来て入門を許された者には到底理解しがたいものである。

へ旅先で

紫陽花邑の事業部旅行があつて四国の屋島に行った時のこと、宴会もすんですっかり酔っ払った日元さんと二人で床にいた。突然日元さんが大声で「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」と繰り返すうち「ガアガアースー」。

南無妙法蓮華経? ナモタカマノハラじゃないの? 私は笑いながら、大倭ってええなあと感じ、安心して眠りについた。

(追悼特集・次号に続く)

自己紹介と表紙絵について

松下 広実(談)

私は昭和30年、長野県は中仙道、妻籠宿の商家に生まれたのですが、幼いころから絵を書くのが何より好きで、青春の頃より親にも告げず、フラリと神戸、奈良、四国などに放浪の旅に出て、各地の廃屋等を根城に、油絵を描き続けてきました。そんな旅も平成24年、奈良公園での絵画修業をもって終了し、今は大和郡山の障害者の事業所「らんまん」に腰を落ち着けて、近くの民俗公園に来る日も来る日も出かけては、絵画研鑽に励んでいます。

この絵は、公園の一角にある梅林を描いたもので、流れる香りに浸りながら、遙か木曾の早春を想いつつ、描き上げました。

平成28年 大倭会行事のお知らせ

【 会 禊 】 毎月第2日曜日

文化行事

- 第329回 4月17日(日)／京都 京都嵯峨野散策
- 第330回 5月22日(日)／京田辺市 酬恩庵一休寺 (第4日曜日注意)
- 第331回 6月19日(日)／大阪吹田 国立民族博物館
- 第332回 10月30日(日)・31日(月)／ 未定

【文化講演会】 11月12日(土)／ 講師：関野吉晴氏 「グレートジャーニー」の冒険家で文化人類学者・医師

大倭会へのお誘い 年会費1万円

郵便振替 : 01060-6-31705

あじさい日誌

2月14日 祝会。この日、佐々木賀乙さんと息子のなぎさ君(京都府亀岡市)が参加されました。

今年も皆さんにバレンタインチョコを頂いてご機嫌の昇ちゃんも、久しぶりに現われて大いにおしゃべりしました。最近は外で見かける時間が少なくなりました?家に居る時間が長い?また5時過ぎには突然、関西学院大学、對馬路人教授と大阪市立大学大学院博士課程の吉田全宏さんが宗教法人としての大倭紫陽花邑について調べに来られました。

2月15日 大倭神宮月次祭。
2月16日 奥津斎庭で、鶯のうらわかき初音を聞きました。
2月18日 編集部の子3人(矢追房子・中村千久佐・岸野春子)が本紙3月号表紙絵を選ぶために「らんまん」へ行きました。

2月20日 交流の家で、午後、FIWC定例委員会。
2月23日 午後1時20分から大倭神宮で申孝祭が、2時から大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は平成4年2月23日の法話をお聞きしました。皆さんの手許に配布された2月号に「申孝祭と大倭のお役目」として掲載したばかりの分です。

第329回大倭会文化行事 京都嵯峨野に和の光を訪ねる

日にち 平成28年4月17日(日) 小雨決行

集合 JR嵯峨野線「嵯峨嵐山」駅

改札口 10時45分

行き先 宝篋院・二尊院・落柿舎など

嵯峨野の散策(昼食はお店で)

交通

(奈良方面から)近鉄西大寺で京都行き急行9時07分発に乗車⇒京都駅9時48分着。JRに乗り換え、嵯峨野線33番乗り場で亀岡行き10時17分発に乗車⇒「嵯峨嵐山」駅10時33分着。

※軽く散策しますので軽装でご参加ください。

問合せ 林修三 電話 080-2527-0840

松本義子さん(大阪府茨木市)が神宮のお参りから参加されました。

2月24日 教長さんの清め祓いを受けてあった八重垣園の土手に生えているクヌギの大木2本が、都合により職人さんたちの手で伐採されました。

2月27日 午後6時から大倭町自治会の役員会が大倭会館において開かれました。

3月6日 大倭神宮月次祭。夕方5時過ぎ、突然女性2人が大倭神宮を訪ねてこられました。

夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。大倭安宿苑では

(菅原園)

3月3日 ひな祭りので女性は化粧をしたり着飾ったりして楽しみました。

(須加宮寮)

3月10日 須加宮寮で卓球大会が行われました。転がし卓球、男女ペアダブルス、女子シングルス、男子シングルスで盛り上がりしました。

(長曾根寮)

2月29日(日) 大阪から3名のボランティアさんが来られ、ハーモニカ演奏や南京玉簾、新聞パフォーマンスなど、盛りだくさんの内容でした。

(茂毛路園)

2月14日 バレンタインデーでおやつは恒例のチョコプレート。

顔馴染みのご入居者同士で手渡して頂きました。ちよっとはにかみもありましたが、ほのぼのとした雰囲気。

(八重垣園)

2月12日 ひな祭りに備え、雛人形の飾りつけを行いました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

4月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*須佐緒祭(大本宮)

4月8日(金) 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の頭面(両面)における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催第567回祝会
4月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*箭負祭(大倭神宮)

4月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の靈威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えてきたことを記念するお祭りです。

*月次祭(大本宮)

4月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

ごぼれずみ

▼和歌山の津名道代さんから「春寒(ごあいさつ)」と称して、私の年賀状にお返事を頂いた。近況をびっしりと印刷されたおハガキに、「間髪を入れぬ解けのお示し、ありがたうございませう」と、心にくい添え書きをして下さっていた。

▼という話をしたら、埋め草がほしいところだった!と言われ、年賀状と重なる方もありますが、こういう記事になりました。

私の「如是我聞」です。

《電気コードを使っているうちに、少しずつ振れていくのを経験された方はたくさんおられることでしょう。

ある日私は師宅の茶の間で振れているコードが気になって、火鉢にあった火箸でコードの振れを解いていたとき、そばにおられた師が「ボンよ、それがホトケや」と一言。「ほとけ?」

「佛」のことか……。

「くだわる心や、とらわれる心をなくすことや」と教えていただいた。生活の中で何気なく言われた一言が一生の指針となっているお言葉のひとつです。

佛の心とはどんなものですか、とお聞きしたことは無かったのですが…… (杉本順)